

小規模校のメリット・デメリット

1 メリット

- (1) 一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい。
- (2) 意見や感想を発表できる機会が多くなる。
- (3) 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる。
- (4) 複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる。
- (5) 運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える。
- (6) 教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。ICT機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である。
- (7) 異年齢の学習活動を組みやすい。体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる。
- (8) 地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい。
- (9) 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる。

2 デメリット

- (1) クラス替えが全部又は一部の学年でできない。
- (2) クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない。
- (3) 加配なしには、成熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい。
- (4) クラブ活動や部活動の種類が限定される。
- (5) 運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる。
- (6) 男女比の偏りが生じやすい。
- (7) 上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる。学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる。
- (8) 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる。
- (9) 班活動やグループ分けに制約が生じる。
- (10) 協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる。
- (11) 教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる。
- (12) 生徒指導上課題がある子供の問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける。
- (13) 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる。

- (14) 教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる。
〔「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」(平成27年1月27日、
文部科学省)より。〕